



私も最初のころは……

遠藤 幸紀

東京慈恵会医科大学附属柏病院皮膚科診療部長

「皮心伝心」という言葉を自分なりに解釈したところ、思いあたるエピソード(思い出)がいくつか頭に浮かんできました。今回紹介するのは、かつて自分が勤務していた岩手医科大学附属病院の乾癬外来でおこった、5～6年ほど前の話です。

その患者さんは、遠く他県からわざわざこの乾癬外来を紹介受診された、重い関節症状で苦しんでいる乾癬性関節炎の女性でした。単にバイオ製剤を導入すればいいというレベルではなかったこともあり、悩みも非常に多い方でした。紹介先の病院ですでに乾癬性関節炎であるという診断はされていますし、聖路加国際病院の誰もが存じあげている著名な先生にも同様の診断をいただいていた。ご本人とお話ししたところ「診断は間違っていないのに治療が効いてくれないことに悩んでいる」また「痛みさえなくなってくればもはや診断などどうでもいいのだ」ともおっしゃっていました。確かにその通りだと思います。

とても混んでいる外来の中、気づけばその方1人の診察にすでに40分が費やされていました*。しかし、とても打ち切れるような状況ではありません。そんな中、診察を待っていた男性患者さんがまだまだ時間がかかりそうなことを知り、外来受付さんに「来週また来る。オレの診察時間の分を(診察中の人に)あげていいから」といい残して帰っていったとのことでした。実はこの男性患者さん、通院当初は自分に不満をぶつけ続け、毎回時間をかけて説明し

ていた方でした。おそらくご自身の姿と重なったところもあったのかもしれません。診察後に受付さんからその話を聞き、ジーンときたことを覚えています。

またそのほかに待っていた多くの患者さんにも誰1人不満を訴えた方はいなかったそうでホッとしました(受付さんに八つあたりする人もいなかったそうです)。看護師さんの声かけにも救われました。ベテランの看護師さんでしたが、同じように時間がかかりそうな患者さんだと察すると、待合いにいる患者さんに「ちょっと時間をかけないといけない患者さんみたいで、少々お待ちせするかも……」と丁寧に声かけをしてくださっていたのです。

今回とは別のときにも「私も最初のころは時間をかけてもらいましたから……」とか「あのころは私のほうが文句ばかりで迷惑かけてただらうね～」などのお返事をいただいていたと聞きました。患者さんにはそれなりにご理解はいただいていたみたいです。

最後に、この乾癬性関節炎の女性の方は、現在は某県の乾癬患者会に入られているそうです。彼女が同じ疾患について悩みを共有し合える仲間に出会えてよかったと、心から思います。

* 週1回の専門外来で受付時間は14～16時の2時間